

連歌集における詞書の書式について

岩 下 紀 之

さて、この巻十四を通読してみると、大別して書式は二通りある。まず短連歌の場合、このようになっているものがある。

秀衡征討のために奥州むかひ

侍ける時なとり河をわたるとて

前右近大將頼朝

われひとりけふのいくさに名とり河

平 景時

連歌集の詞書がどのような意図で整えられているか検討してみたい。本稿は勅撰集に準ぜられた両「菟玖波集」を主にとりあげてみることにする。ところで連歌集は大きく付句の部と発句の部にわけられるのであるが、うち発句部はほとんど各句に詞書が付けられ、その句の題や、詠まれた日時などが記されている。これは和歌集の場合と同じことである。付句部は連歌特有のところであるから、こちらについてまず考えることにしたい。

「菟玖波集」には室町期にさかのぼる書写の完本が今までのところ知られていないようである。しかし零本ではあるが南北朝期の素眼筆本として、巻十四（横山重氏蔵）と発句部の巻二十（書陵部蔵）の二巻がある。詞書の書式などは転写を重ねるうちに変化をこうむりやすいことが想像される。この素眼本はその点、「菟玖波集」成立時にきわめて近い書写であるから、一部に脱落はあるものの、大変貴重なものとしなければならない。

三三きみもろともにかちわたりせん
つまり、詞書が二字さげて書かれる。次に前句の作者名、次に前句、次に付句の作者名、次に付句となる。この際付句と前句とは同じ高さにそろえて書かれ、双方ともに作者名が付されているのであって、これは前句付句の両者を対等に扱っているものといえよう。これは何も珍らしいことではない。勅撰和歌集の連歌部、例えば伝二条為忠・世尊寺行忠筆本「拾遺集」にしても伝為家筆本「金葉集」でも同じことになっている。一例をあげると、中將に侍りける時右大弁源致方朝臣のもとへやへこう

はいをおりてつかはすとて

右大将実資

流俗のいろにはあらす梅花

むねかたの朝臣

珍重すへき物とこそみれ（拾遺集卷十八）

となつていて、前述の「菟玖波集」の例と同様になっている。つまり、「菟玖波集」が勅撰和歌集の連歌の書式に合わせたのである。

次に百韻から採録されたと推定される例はこうなっている。

後鳥羽院御時百韻連歌たてまつり

ける中に 鏡の山に月そさやけき

従二位家隆

一三三にはてるやにはのさゝ浪うつりきて

ここでは詞書と前句とは改行することなく、一字分の空白をおいて（ただし、これがない場合もある）続けて書かれる。この際前句の作者名は書かれず、次行に付句の作者名、次行に付句となるのである。

「菟玖波集」は勅撰に準ぜらるべき意図のもとに編集されたのであるから、先例として勅撰和歌集が意識されていたのは明らかである。前に述べた短連歌の、前句付句を対等に扱かう書式は勅撰和歌集の連歌部に倣うものであった。今度の例はどうであろうか。結論から述べると、こちらは勅撰和歌集の和歌の書式に準ずると思われる。

平さたふんが家哥台によりみ侍ける

壬生忠岑

はるたつといふ許にやみ吉野ゝ山もかすみてけさはみゆらん
「拾遺集」の巻頭を引いてみたが、詞書は二字ほど下げて書かれ、次に作者名、次に和歌となる。連歌の詞書プラス前句、改行して付句の作者名、次に付句というのと等しい。こうしてみると、前句は詞書に含まれ、詞書の一部として処置されているのである。さて、付句の部では詞書はかなり少ない。巻十四で見ると、全102句のうち（これは素眼本の句数で、脱落が二丁分7句ほどある）詞書のあるのは8例、このうち前者の前句付句対等型は3例、後者の前句の作者名を書かないのが5例である。残りの94例は詞書がなく、前句のみである。一例をあげると、

名こそおしけれわすれはてなは

後深草院少将内侍

一三四あさりするにはひのかたのうつせかい

二字下げの前句、付句の作者名、付句ということで、ここでも前句は書式上詞書として扱かれていることになる。

以上に見たような書式は、書陵部蔵の「菟玖波集」巻十七、巻十九にも共通している。この両巻は同筆で、書写は室町期を降らないと見られるが、残念ながらいずれも大きな脱文があって、その巻の全容を見ることができない。しかし詞書の書式は、素眼本の両様の書式を保っている。前句付句対等の形で、

梅花を折てつかはすとて

後小野宮右大臣

流俗の色とはみえず梅の花

源致方朝臣

八云珍重すべきものとこそしれ

又、前句に作者名のない形では、

死たるをしに札を付て書きつけ侍りけるおしと思はてた
れころしけん

良心法師

八云水鳥はいけなからこそみるへきに

このように室町期にさかのぼる古写本の書式から、「菟玖波集」原本の書式もこのようであったと思われる。すなわち、短連歌の一部は勅撰和歌集の連歌の書式に従う。その他の大多数は、詞書の有無にかかわらず、勅撰和歌集の和歌の書式に従う。つまりいづれにしても勅撰和歌集の書式に従っているのである。

ここで思い出されるのは「長短抄」の

連歌ノ前ノ句ハ歌ノ題ノ如シ、サレバ歌ニ題アリ、連歌ニ前
ノ句アリ

という記述である。前句は付句と対等のものではなく、歌の題の如きものであるということだが、内容的にはともかく、形式的には「菟玖波集」の多数の書式にあてはまるようだ。詞書はその和歌の詠吟にあたっての時や場所を説明し、題は歌の内容をあらかじめ規定する。

堀河院の御時百首哥めしけるに立春の心をよみ侍りける（金
葉集巻頭）

とあれば、詞書前半で和歌の作られた事情を説明し、次にその題をしるしている。これは、「菟玖波集」の例で見た、詞書、前句

の關係と全く同じことである。つまり前句は題の如きものであり、書式上は詞書として扱われているのである。

なお、近世の書写本では、以上の書式は失われている。こころみに、金子博士「菟玖波集の研究」で、諸本の中ではすぐれたものとされている広島大学本で、近世の写本を代表させ、素眼本と同じく巻十四冒頭を引くと、

後鳥羽院御時百韻連歌奉りける中に

かゝみの山に月そさやけき

にはてるやにはのさゝ波うつり来て

となっていて、前句は必ず改行されている。近世では「菟玖波集」の書式の意味が不明になっていて、原の姿を伝えることができなかったのであろう。

次に「新撰菟玖波集」をとりあげてみる。使用するのは天理図書館蔵実隆本とするがこの本はあらゆる点で最良の本文と考えられている。ここでは「菟玖波集」にあった二つの書式のうち、前句、付句を対等に扱う例が皆無となっている。（ただし、三句連続の例が一つある。）一例をあげると、巻一、

家の百韻の連哥に朝になりぬ

雪のむらきえといふ句に

慈照院入道贈太政大臣

四夜半に春いつくの山をこえつらん
ここでは詞書と前句は完全に一体化している。つまり、前句は完全に詞書となったわけである。

さて、連歌という文芸の形態は前句を欠くことはありえない。しかし、前項でとりあげた、その句の詠まれた時のさまざまな事情を記すところの詞書は欠けていてもさしつかえはない。

それでは両「菟玖波集」でこの詞書はどのようにあらわれているであろうか。今最も機械的に、前句以外の言葉が含まれているものをすべて詞書と認めて、その数値をまとめてみた。例えば、「……といふ句に」というようなものも詞書に含めた。

「菟玖波集」では、巻一春上26、巻二春下15、巻三夏14、巻四秋上15、巻五秋下9、巻六冬8、巻七神祇9、巻八釈教10、巻九恋上14、巻十恋中11、巻十一恋下9、巻十二雑一19、巻十三雑二10、巻十四雑三9、巻十五雑四9、巻十六雑五8、巻十七旅19、巻十八賀15、巻十九俳諧51、聯句連歌9、雑句7、片句連歌7となる。なおここでは全巻にわたって調査する必要上、広島大本を使用した。総計306例となる。ただし、巻十九は「新撰菟玖波集」には排除された部立であるし、またほとんど各句ごとに詞書が必要となる特殊な部であるからこれを除外すると、計232例となる。

これに対して「新撰菟玖波集」では、巻一春上9、巻二春下7、巻三夏4、巻四秋上9、巻五秋下9、巻六冬2、巻七賀3、哀傷3、巻八恋上9、巻九恋中4、巻十恋下5、巻十一旅上2、巻十二旅下3、巻十三雑一5、巻十四雑二8、巻十五雑三4、巻十六雑四3、巻十七雑五7、巻十八神祇2、釈教3、総計111例となる。

両集の付句の総数を、「俳諧大辞典」によって示すと、「菟玖波集」二千九十句、したがって詞書のある句は14%となる。「新撰菟玖波集」は千八百二句なので詞書のある句は6%となる。詞書の数は新旧で、306対111、又は232対111、つまり「菟玖波集」の約二分一に詞書が減少していることになるのである。

「菟玖波集」の詞書は、連歌史的に意味のあることをかなり網羅的に記しているようである。鎌倉時代の連歌や、花下連歌について、その実態を探る時、詞書は基礎的な資料になっている。それに対して、「新撰菟玖波集」ではどうであろうか。ここで簡単に調査してみたい。まず、時と場所を明記するものがある。一例をあげれば、巻七・一三三二に、

永享五年四月仙洞にて百詠の連歌に

このようなものが37例ある。次に場所を記すもの。巻十三・二四七七

前関白近衛家にて百詠の連歌に

この類が16例ある。

百韻以外の形態の連歌である、つまり千句や前句付であることを示すもの、また独吟であることを示すもの。巻八・一五四〇

独連歌の中に

これは16例ある。

次に特に意味はないのだが、巻八・一三九七

いのちきりは神よことはれと侍る句に

というように、「……といふ句に」というもの。これには巻頭句のように「……と侍句に三元のこゝろを」という変型もある。こ

れが10例ある。こう見てくると、日付や場所を記している、その具体的な情況を示すような詞書がないことが注目される。さて、このように形式的に分類してもさして意味がないし、またそれぞれ重複している詞書もあるので（例えば内裏での前句付など）、内容に即して考えてみたい。詞書のある句が実際に作られたのがどこであるかによって調査してみる。つまり「家の百韻」とあると、その家が誰の家であるか、また御製であれば、特に注記のないかぎり内裏での興行と考える。そのようにしてみると、内裏50例、將軍家11例、摂関家、大臣家などの公家15例、仙洞2例、地方での興行は卷十二の周防（入道前右大臣）奈良（宗祇）とわずか2例である。よく言われる連歌師の活動圏の拡大は、ここからは全くうかがわれないし、内裏の占める割合が圧倒的なのである。次に、詞書の付せられた句の作者について調べると、皇族30句（うち今上御製18句）公家46句。それに対し武家10句（うち足利義政8句）となる。連歌師についてみると宗祇5句、肖柏4句、宗砌3句、心敬、専順、宗伊、宗長がそれぞれ1句計16句である。ここでも明らかに貴族社会の割合が多い。連歌師の句の詞書は、「付かたかるへき句をあまたし侍て人のつかはし侍し中に」（卷三宗砌句）、「……といふ句に」（卷五宗砌句）「……といふ発句に」（卷五心敬句）というようにあまり具体的でなくて、時、場所を明記することの多い宮廷関係の詞書とは、かなり異っている。卷十四の宗祇の句には將軍家での百韻、卷十七の肖柏の句には内裏での百韻という詞書があるが、これらはむしろ例外なのである。

それではこのような偏りは、何に由来するのであろうか。「端的に言って『竹林抄』から再録の七賢作家の作品には、詞書が少なく、御製など内裏の懷紙資料から直接採録したと見られる作品には、詞書が多い」ことが金子博士「新撰菟玖波集の研究」に指摘されている。本稿の調査でもこのことは一応正しいと考えられる。しかし、詞書の有無は原資料の性格によって左右されるのみであらうか。「竹林抄」から採録された七賢の句のみならず、宗祇の同輩、後輩の連歌師の句も詞書が少ないのである。例えば兼載の句は付句46句が採録されながら全く詞書がない。本人が「新撰菟玖波集」の撰者の一人なのであるから、句の成立時の事情を知らないはずはない。また「竹林抄」を見ると付句の部全巻で詞書は、巻頭「ふりにし年の高円の宮といふ句に」というように、各巻冒頭に必ず「……といふ句に」とあるのが、全巻を通じて巻一から巻九までの九箇所あるだけである。「竹林抄」の資料について特に調査はなされていないようであるが、いづれにせよ句集類や懷紙類がもとにあったと仮定してよからう。また宗祇が直接師事した宗砌、心敬、専順の句について、各句の成立時等を全く知らなかったとは考えられないし、現に「新撰菟玖波集」には加筆している例もある。にもかかわらず「竹林抄」には「……といふ句に」以外に詞書は存在しない。とすると、詞書を記さないのは宗祇の意志だったのではないだろうか。そして「新撰菟玖波集」でも、連歌師たちの作品については大むねこの原則が守られているのである。入集句の多い連歌師達の句に詞書が少ないのであるから、詞書総数が減少するのはまったく当然である。

宗祇が意図的に詞書を記さなかったということは、宗祇自身の句集を検討しても確かめられるのである。「宗祇句集」(角川書店刊)を見ると、最初期の「萱草」(文明六年成立)には時として詞書をまじえるが、初編本「老葉」(文明十三年)になると、各巻のはじめに「……と云句に」とあるのみであり、以後の再編本「老葉」「下草」には詞書は存在しない。「竹林抄」成立は文明八年頃である。時とともに詞書が排除されて行くのが明らかである。宗祇の句集はそれ以前の連歌師の句集と比較すると、画期的なものと言えるであろう。「七賢時代連歌句集」「心敬作品集」を見ると、句集と言っても単に自分の句を書き留めたにすぎないものが散見している。部立をととのえ、収録句が千句にも達するような「老葉」「下草」は宗祇にとって相当な重要な作品であったに違いない。そこでの詞書の取り扱いが熟考のあとでの処置であることも明らかである。

それでは詞書排除の意図は何であったのか。詞書はある作品の成立事情を明らかにする。ある作品は必ずある瞬間に創作されるのであるから、連歌集においてもこれを書きとめる必要を認めたのであれば書いたはずなのである。これを除外すれば残るのは前句だけであり、前句は前に見たように「題ノ如」きものだから、前句と付句の両句で、いわば「題詠」のごときものとなるのである。ある旅の句がどこで詠まれたかは全く無視されて、ちょうど歌題のもとの和歌と似たものになっている。そしてそれらの作

品が勅撰集の部立の論理に従って配置されるのであるから、「新撰菟玖波集」はまさに勅撰集に準ずる連歌集となったのであり、読者はこれを「題詠の如きもの」として読まされることになっている。詞書が旧「菟玖波集」に比べて半減している「新撰菟玖波集」では読者は各句を、その句の詠まれた具体的情況から離れて鑑賞させられることになる。「菟玖波集」巻一

宝治元年三月毘沙門堂の花のもとに

さくら色に空さへとつる梢かな

無生法師

元花にもり来るうくひすの声

また

文和二年六月世間しつかならぬ事ありて美濃国をしまたいふ所行宮にて待けるに同七月かの所にて連歌侍しにをしまの里はたゝ松の風と侍に

関白前左大臣

一六器旅にあるみのゝを山のうき秋に

これらは、詞書と句とがあいまって印象的なものであるが、「新撰菟玖波集」ではこのような臨場感は見出し得ない。

さて何らかの時と場所に規定される百韻の会席での句と、撰集に入集された付句では何か質的な変化が起こるように思われる。

「新撰菟玖波集」羈旅下から引用してみる。

手にとるはかり見ゆるおも影

読人不知

三翌夕月夜そてよりいつる山こえて

をちかた人をよくる秋かせ

宗祇法師

三三 七月しろき山ちに駒のをとはして

こえしとののりもくるしき道にして

宗長法師

三三 九雪ふむこまのあしひきのやま

こあ／＼かはす人のやと／＼

宗砌法師

三三 三たひの暮るの駒いはへ犬はえて

この四句連続の部分が各句の題材が共通していることよって、ここに集められたのは明らかである。すなわち、二三四九まではいずれも山越をしていることが共通している。一方二三四七からはいずれも駒を詠んでいる。この旅の巻全体の有機的構造の一部が荷わされているのである。いわば全体の設計図がまずあり、この部分を山越の旅としようという計画に応じて、そこにはめこむべき素材として各句は存在している。宗長の句二三四九について言えば山の旅から宗砌の馬と犬とのとり合わせの句への、橋渡しという役割をも分担しているのである。ところでこの句は延徳三年の「湯山三吟」から採録された句である。

60 老いてや人は身をやすくせん 祇

61 こえじとの矩もくるしき道にして 柏

62 雪ふむ駒のあしひきの山 長

63 袖さえて夜は時雨の朝戸出に 祇

この作品が「湯山三吟」の中の一句であること、また前句の作柄

が肖相であることは、「新撰菟玖波集」入集にあたって当然無視される。百韻中にあるのは各句の意味は多様に解釈されるわけ、この場合60の宗祇の述懐の句が63では旅に変容しているのは61の「こえじ」「のり」を62で宗長が「越えじ」「乗り」ととりなしたためである。このような解釈の自由な可能性は、百韻の座においては最大限に発揮されているのであるが、撰集のある位置に句がはめこまれた瞬間に、句の意味は固定されてしまうのである。

以上宗祇にとっての詞書排除の論理を見てきたのであるが、その意味は付句一句が独立し、具体的な百韻の場をはなれて抽象的、観念的に固定化されるところにあると思われる。そして、その立場は宗祇自身の句集や、「竹林抄」により一層明瞭に表わされているのである。

次に「竹林抄」と「新撰菟玖波集」の発句部をとりあげてみる。

東に下り侍し次の年初冬の頃時雨を
めくる間をおもへは去年の時雨哉 心敬
おなし心を

山を越へ宮古をめくるしくれかな 宗砌
河音は山もとめくるしくれかな 行助
雲は猶さためある世の時雨かな 心敬
きく程は月をわするゝ時雨かな

この引用句群の四句目の心敬の句は、「新撰菟玖波集」ではこうなっている。

応仁の比世のみたれ侍し時あつま
にくたりてつかうまつりける

三〇雲は猶さためある世のしくれかな 心敬

心敬の伝と重ねてみれば、応仁の乱とその影響がまざまざと浮ぶようになってゐるのだが、「竹林抄」でこの句は単に「おなじ心を」という詞書のみを伴っている。ここで「おなじ心」は「時雨を」というのみであつて、宗祇はこの発句の産み出された時代の背景を無視しているのである。それに関連すると思うが宗祇は、「竹林抄」発句部詞書において、一度も年号を書いていない。集中宗祇の「会所の奉行承し翌年」とか、「宗祇草庵をむすひてはしめて」とか、具体的事実を書くこともあるが、これらは日付をつけないければ、「会所奉行に任ずること」、「新宅落成のこと」というような一般的な事例となり、「落花を」とか「時鳥を」とかといういわゆる題を本質的に類似してゐる。

さて「新撰菟玖波集」の詞書が「菟玖波集」と比べると半減している一方、「竹林抄」では詞書が付句の部でほとんど存在しないことを見てきた。宗祇が自分の意志を貫いたとすれば「新撰菟玖波集」も付句の部では詞書が消滅し、発句部では年号が削除されたのではないか。つまり非歴史化されたのではなからうか。現状はこれと異なり、付句の部でも年号を示すものが53例ある。発句の部で数えると11例ある。これらは大部分皇族、有力者の句に付せられたのである。これには何か政治的な規制があったのかもしれない。けれども、準勅撰集という公的な集と、私撰集との違いをまず第一に考えるべきなのであろう。私的な営みであれば、たとえ一条兼良に序文を仰いだにしても、自己の理想とするとところを貫徹しても何らはばかることはないはずである。ところが準

勅撰集になるとそうはいくまい。後土御門天皇の治世を記念するものとして、すぐれて歴史的な性格を付与されているからである。仮に「応仁の乱」を想起させる詞書があるにしても、それは今明応年間の太平を、(これが主観的、観念的であつたにせよ)強調するのである。天皇や貴族の動静は、いつどこで連歌を行なつたというような些細なことも詞書とする価値があつた。それに対して、連歌師の動静は、大むね歴史的価値がなく、また宗祇の理念からも書き記す意味がなかつたのである。

※本稿で用いた本文は、「菟玖波集」は素眼本の巻十四、巻二十、書陵部本の巻十七、巻十九のほかは「連歌貴重文献集成別巻一」番号は「菟玖波集の研究」所収本による。「新撰菟玖波集」は「天理善本叢書」所収本により番号は「貴重古典籍叢刊4」による。「竹林抄」は統群書類従本。別に伊地知本を参照した。「拾遺集」「金葉集」は「愛媛大学古典叢刊」によつた。

注(1) 書陵部本の巻十七、十九では前句を改行するのが一例ずつある。その他詞書が一行分の字数とちよつど一致して次行に前句が書かれている例もある。

(2) 宗祇の「萱草」「老葉」「下草」の各発句部にも年号は書かれていない。「宇良葉」の追加部分に「明応九年」とあるのが唯一の例である。